

オットー・サロモンの初期スロイド教育

——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——

横山 悦生 (名古屋大学)

「産業教育学研究」

第36巻 第1号 抜刷

2006年(平成18)年1月

オットー・サロモンの初期スロイド教育

——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——

横山 悦生 (名古屋大学)

概要：1872年に創設されたネース・少年スロイド学校はヘムスロイドを教えていたが、その2年後の1874年に入学年齢を12～13歳（国民学校修了後）から10～11歳に下げ、多くの普通教育科目を導入して、国民学校としての性格をかねそなえたスロイド学校に変化した。この組織改革によって、同校のスロイド教育の目的は一般的な技能を獲得させることに転換した。本稿では、1872年から1876年までのサロモンのスロイド教育の実践の検討からサロモンがシグネウスと出会う1877年5月以前に普通教育としてのスロイド教育の理念を形成していたことを明らかにした。

キーワード：オットー・サロモン／スロイド／スロイド学校と国民学校の統合／ネース・少年スロイド学校／ウノ・シグネウス

1. 先行研究と課題

(1) 課題

スウェーデンのスロイド教育は、1880年代から1900年代にかけて世界の手工教育に大きな影響を与えたことで知られている⁽¹⁾。筆者は、技術教育の観点からスウェーデンのスロイド教育に関心を持ち、世界の手工教育に影響を与えた内容、スロイド教育が北欧において成立した歴史的背景に関心をもって、研究をすすめてきた⁽²⁾。本稿では、スロイド教育の理念と教授法について、その発展に大きな足跡を遺したといわれるオットー・サロモン (Otto Salomon, 1849-1907) に注目し、彼の初期のスロイド教育の実践（とりわけネース・少年スロイド学校での実践）の到達点を明らかにし、それとのかかわりでフィンランドの「国民（民衆）学校の父」と称されるウノ・シグネウスの影響について検討する。

(2) 先行研究

このように課題を設定するのは、オットー・サロモンのスロイド教育にウノ・シグネウス⁽³⁾が影響を与えたという指摘があるからである⁽⁴⁾。松崎巖は「1877年、サロモンはフィンランドにシュグネウスを訪ねスロイド教育について大きな影響を与えられた」と述べている。そこで松崎は、「①スロイドは経済的な必要に基くのではなく、教育的な根拠に立つべきこと、②スロイドは職業技術（教育——引用者）としてよりむしろ普通教育の一環として考えるべきこと、③スロイドを教えるものは職人ではなく、教員であるべきこと、④小学校ではスロイド教育には専科教員でなく全科担当の一般教員が当るべきことをシュグネウスから教示されたのであった」と1877年のシグネウスとの出会いに注目している⁽⁵⁾。そのように松崎が指摘する根拠は、ベネットの *History of Manual and Industrial Education 1870-1917* という1937年の記述にもとづいている⁽⁶⁾。さらに、遠藤敏明は「シグネウスがサロモンに与えた最も大きな影響は、スロイドを国民学校の一教科として取り入れることを確信させたことであると思われる」とし、二人の出会いを重視している⁽⁷⁾。また、本多雄伸も1877年の二人の出会いを重視する立場から、それ以前のネース・少年スロイド学校のスロイド教育を職業教育とら

えている⁽⁸⁾。

他方、海外においては、古くは上記のベネットの *History of Manual and Industrial Education 1870-1917* がサロモンのこの時期のスロイド教育についてとりあげ、「経済的な必要にもとづく」、「本質的にホームスロイドであった」としている⁽⁹⁾。1990年代に入ってから、Hans Thorbjörnsson (1990)⁽¹⁰⁾や Hans Joachim Reincke (1994)⁽¹¹⁾の二つの著作がサロモンのスロイド教育をとりあげている。しかし、これらの研究も1880年代半ばに体系化され、その教授法が1890年代により精緻化された「教育的スロイド」に焦点があてられており、サロモンの初期のスロイド教育への言及は先に紹介したBennettの評価と基本的に同じであり、それを「教育的スロイド」の前史として事実経過を紹介しているにすぎない。

以上、内外の先行研究に共通していることは、1877年5月以前のサロモンのスロイド教育の実践の検討がなされておらず、多かれ少なかれ、1937年のベネットの研究を引き写している点にその特徴がある。

本稿は、サロモンの初期スロイド教育の理念の発展に対するシグネウスの影響を検討するために、サロモンがシグネウスを訪問する1877年5月以前のネース・少年スロイド学校の実践を、とくにそこにおける普通教育としてのスロイド教育の理念の形成過程に注目して検討する。

2. サロモンの1874年までの教育への関心とスロイド教育の実践

(1) サロモンの生育歴と教育への関心

オットー・サロモンは、ユダヤ人の両親のもとで1849年11月にイエーテボリ (Göteborg) で生まれた。当時としては、ユダヤ人はスウェーデンにとって最初の移民であった⁽¹²⁾。サロモンの父方の祖父にあたるベンジャミン・サロモン (Benjamin Salomon) と祖母ソフィア・ニイセン (Sophia Nissen) は1780年代にドイツ北部（当時はプロシア）の町 (Mecklenburg地方にあるGoldberg) からストックホルムに移住してきた。当時のスウェーデンでは、外国人に対する恐怖がひろく存在していた⁽¹³⁾。ユダヤ人に許された経済活動は商

業活動かギルドの規定に抵触しない手工業であった。サロモンの母方の祖父アロン・アブラハムソン (Aron Abrahamson) はプロシアでは記章彫版工 (medaljgravör) であったが⁽⁴⁴⁾、1812年にスウェーデンに移住して以来、海運業者として働いていた。ユダヤ人の子どもがスウェーデンの学校に入学を許されたのは1859年、ユダヤ人が完全な市民権を得たのは1870年のことであった。

サロモンは、14, 15歳まではいくつかの私立学校で学び (7, 8年間)、その後1864年にイエーテボリにあるギムナシウム (“Högre Realläroverket i Göteborg”) に入学し、1868年春には大学入学資格試験 (mogenhetsexamen) に合格した。同年の秋学期からストックホルム工科大学 (Teknologiska institutet) の1年コースに入学した⁽⁴⁵⁾。ところが、1869年2月に母方の叔父にあたるオウガスト・アブラハムソン (August Abrahamson, 1817-1895) の妻が死亡し、その後親戚から叔父の所有地の管理を助けるように説得された。長い思案の後にストックホルム工科大学での学習を継続することを断念し、1870年10月からウルツーナ農科大学 (Ultuna lantbruksinstitut) において特別学生として1871年の夏まで学習した。その後サロモンは、イエーテボリから30キロメートル東に位置するネースへ移った。移住した直後から、サロモンはネース近郊の国民学校 (folkskola) を訪問したり、イエニー・ベリエ (Jenny Berg) が子どものために設立した日曜学校で教えている。このような事実でサロモンの教育への関心の高さをみることができよう。

(2) ネース・少年スロイド学校の創設の経緯とその教育内容

サロモンの叔父のアブラハムソンは当初、彼が住んでいる教区 (Skallsjö församling) の学校委員会 (skolråd) にスロイド学校を設立するための寄付の提供を申し出たが、その委員会はすでに設立されていた幼児学校 (småskola)⁽⁴⁶⁾の維持にその寄付を使用したいということで、スロイド学校を設立することには至らなかった。そこで、「あらゆる種類の実践的労働 (alla slag af praktiskt arbete)、とりわけそれに関する手の技能 (handsskicklighet) に心からの関心」をいっていたアブラハムソンは、私立のスロイド学校としてネースやその周辺に住んでいる国民学校⁽⁴⁷⁾を修了した男子を生徒として受け入れるネース・少年スロイド学校 (Näås slöjdskola för gossar) を1872年2月に創設した⁽⁴⁸⁾。このスロイド学校は、1860年代後半にヘムスロイドが後退した後⁽⁴⁹⁾、そのことに危機を感じた人々が1870年代におこした復興運動と結びついて、スウェーデン国内の各地につくられたスロイド学校の一つであった。ネース・少年スロイド学校でとりあげられた教育内容は、数学、線図 (linearritning)⁽⁵⁰⁾、糸鋸 (löfsågning)⁽⁵¹⁾であり、数学と線図はサロモンによって、糸鋸はスロイド・インストラクターであったボリエストローム (C.A. Borgström) によって担当された。

1872年7月から実習設備を備えた新しい校舎が完成し⁽⁵²⁾、木工 (snickeri) という科目が新たに実施された。この科目を担当したのは、アルフレッド・ヨハンソン (Alfred Johansson) で、彼は「農場のスロイダレ (slöjdare) の一人」であった⁽⁵³⁾。

最初の年のスロイドの授業で製作したものは、“熊手”と“手押し車”であったという⁽⁵⁴⁾。この段階での取り組みは農民の生活に役立つものをつくる技能を育てることを目的としているスロイド教育であったと考えられる。つまり、ヘムスロイドを教えることを目的としていた。学校の授業は毎日10時間ずつ、週6日間 (月曜日から土曜日まで)、年間50週実施された⁽⁵⁵⁾。一日10時間のうち、7時間はスロイドの授業で、あとの3時間はその他の教科にあてられた。木工という科目には、次第に旋盤作業 (svarvning) や彫刻 (träsnideri) の内容が加えられた。また、一部の生徒のために馬鞍づくり (sadelmakeri) も加えられた。糸鋸については最初の1年目の取り組みを通して生徒に教えるのにあまり適切ではないという理由でとりあげられなくなった。生徒には当初補償金 (godtgörelse) が1日につき40オーレが支払われた。それは、生徒の親⁽⁵⁶⁾は国民学校を終えた子どもに勉強させる余裕がないことが判明したからであり、生徒が学校に来なくなると学校を閉鎖せざるをえないという判断からであった。しかし、次第にこの学校を卒業した生徒が比較的有利な仕事を獲得することができることによって世間の関心もたれるようになってから、この補償金の制度は1877年に廃止された。

3. 1874年の組織改革後のスロイド教育 (1876年まで)

次に本稿の主要な課題である1874年以降のスロイド教育の実践を検討する。

(1) スロイド学校への入学年齢の引き下げ

創設当初は先述したように国民学校を修了した生徒 (12歳以上) を入学させていたが、「スロイド教育が基礎的であることが次第に明らかになり、それが専門的教育の分野には含まれないことが明らかになってきたので、スロイド学校への入学者の年齢を下げる必要性がでてきた」⁽⁵⁷⁾として、1874年にスロイド学校への入学年齢を2年下げる改革を実施した。こうして「スロイド学校への入学年齢が国民学校の上級段階⁽⁵⁸⁾に入る子どもたちの平均年齢と同じ」になり、「私立の国民学校高等部 (en privat högre folkskola)」となった。

そこで、「理論的教科の授業の方も変化させる必要性がでてきた」ので、教科の構成は、キリスト教の知識、歴史と地理、算数と幾何、スウェーデン語、理科、清書、線図、軍事訓練となり、スロイドは木工、旋盤作業、彫刻 (träsnideri) から構成された。さらに算数と幾何、線図は「通常の国民学校よりも重視された」時間配分となった⁽⁵⁹⁾。サロモンはこのスロイド学校を「スロイドという教科を特徴とする国民学校に徐々に移行していった」と特徴づけている⁽⁶⁰⁾。

(2) 1875年頃の少年スロイド学校での実践

1875年頃の少年スロイド学校での実践については、サロモン自身が後に (1891年に) 「スウェーデンの教育的スロイド (svenska pedagogiska slöjdundervisning) の基礎になっている考え方を創出する試みがなされた」⁽⁶¹⁾と回顧しているように、注目すべき実験がこのスロイド学校の生徒を対象になされた。その実験の特徴の1つは、スロイドの授業でとりあげるスロイドの種類を一つかあるいは関連するものに限定する

ことであった。1876年にはこの点でなされた試みの結果として木工に集中することのメリットが明確になったとサロモンは述べている。「理論的な観点からは、すべての学校の生徒に多様な種類のスロイドに関する知識と技能を獲得させることはメリットが大きいように考えられるが、実際にやってみると状況は異なったものとなった。すなわち、多様な教材への力の分散は、概して何らかの種類の技能とすべてに関するいい加減で、不十分な知識をもたらすこととなった。多くの種類の道具の使用は、道具の操作の確実な習得を妨げた」。木工のメリットは「生徒がのこぎり、かん、ハンマーなどの日常生活でしばしば出会う道具を利用することになれること、木工工作台で立っている状態は、本や製図机で座っている状態との必要な交換になること、力を使うことを通して体力の発達を要求すること、木工以外のものよりも、木工の方が日常生活に役立つものをつくることができる」ことにあった⁶²。

この少年スロイド学校での実践のもう一つの到達点は、「実際に教育的な転換を引き起こすために、方法的に正しいやり方で（スロイド教授を）組織する」ことであった。その「教育的なスロイド教授」の方法は「職人の慣習的な養成方法とは異なる」とし、「慣習的な方法は道具の操作や接合等をそれだけ分離して取りだして学習させ、その後実際の作品を製作する」方法（「前練習（förövning）」といわれる方法）であり、「抽象的なものから具体的なものへとすすんでいく」方法であるとしている。それに対して「教育的なスロイド教授」の方法は「まったく反対の方法」であり、「具体的なものから抽象的なものへと進んでいく」とする。また、職人の養成では「最初の道具としてのこぎりから出発する」のに対して、「教育的なスロイド教授」ではナイフを「基本的な道具」とする。ナイフは「最も普通にある道具」で、「一般的な技能を獲得するのに適している」とする。そして、「このスロイドに特徴的な道具であるナイフだけをつかって、使用可能なものをつくることできることも重要な点である」としている⁶³。

以上みてきたように、1876年の時点においてサロモンはすでにスロイド教育を木工に限定することの有効性を発見していた。すなわち、木工は日常生活で出会う道具を使用すること、体力の発達を促すこと、日常生活に役立つものをつくることなど点で、普通教育的意味をもつことを発見したのであった。1872年にネース・少年スロイド学校が開始されたときにはそこのスロイド教育はヘムスロイドを教えることが目的であったと考えられるが、その2年後の組織改革でより多くの普通教育科目を導入することによって、スロイドに配当する時間が減少させられ、そこのスロイド教育は「一般的な技能を獲得する」ことに目的がおかれるようになった。また、教授法の点でも、職人による「慣習的な方法」から、ナイフの使用から出発するという方法へ転換していたが、これも「一般的な技能を獲得する」目的への転換からもたらされたものであった。

4. 普通教育的スロイドへの転換の要因

(1) スロイド学校と国民学校の統合問題

このようなスロイド教育の目的や教授法の転換が起こった要因には、第一に、当時の民衆教育機関の発展過程におけるスロイド学校と国民学校の統合問題があった。

1860年代半ばから1870年頃にかけてのスウェーデンの農村部でのヘムスロイドの減少とかかわって1870年代に創設されたスロイド学校は、1842年の民衆教育令以降、国民（民衆）学校が整備されていくと、1870年代半ばにはこの両者の統合という問題に直面することとなった。ネース・少年スロイド学校の1874年の組織的変更がその一つの例であった。

サロモンは、*Slöjdskolan och folkskolan I*（スロイド学校と国民学校）（1876）において、スロイド学校と国民学校とを統合する必要を主張しているが、その根拠を以下のように述べている。「よく知られているように、肉体労働者の両親はしばしば自分の子どもの教育にあまり時間を割くことが出来ないし、またそれを望んでいない。国民学校の生徒の年齢は14歳を超えることは概してほとんどない。子どもたちが両親と一緒に住んでいる家に実際に役立つものをつくることのできる体力ができ次第、できるだけ早く親の仕事を手伝うことを両親たちは望んでいるし、子どもの助けなしには両親はやっていけない。したがって、多くの場合最低限の知識を学校で学んだ後は、子どもたちは本とペンを置き、学校教育を中断せざるをえない。それに代わって自らの時間と体力を自分の家や他人のところでの労働にささげざるを得ないのである。この残念な事実から、スロイド学校はなにか特別な補償なしには、国民学校の中からその生徒を募集せざるをえないのである。」「もちろんスロイド学校が国民学校から独立して活動することができるようになる場合もある。つまり、国民学校の卒業証明書を受け取った子どもの中から生徒を獲得することができるようになる場合もある。しかし、そのような状態は、現在や近い将来においては例外としてみなければならない。」⁶⁴

貧しい農民の子弟を対象としたスロイド学校は国民学校と統合して、はじめて生徒を確保できるという実態が存在したのであるが、そのことによって、スロイド教育に配当される時間数は当然減少する。そこでのスロイドは、販売を目的とする農村工業的なヘムスロイドではなく、より一般的な性格をもつものへの転換が迫られた。

(2) 国民学校の実際化

他方、国民学校の方もスロイドを教科として導入することにより、書物中心の知識の学習と実践的な学習とを組み合わせることで、農民からみれば書物中心での知識の学習に偏しているとみられていた国民学校の実態を変化させることがもめられていた。そのことによって国民学校への進学率を上昇させるねらいもあったと考えられる。1876年にエルフスボリエ県のヘムスロイド協会が「スロイド学校と国民学校の統合はいかに可能か」という懸賞問題を公募し、サロモンが1878年に編集・発行した*Slöjdskolan och folkskolan II*（スロイ

ド学校と国民学校)に数編の論考が掲載されている。この問題が当時のスウェーデンの国民(民衆)学校改革の重要な課題の一つであったことを示している。

(3) スロイド教員養成の問題

さらに、スロイド担当教師及び教員養成の問題が存在した。サロモンは1870年代に各地にスロイド学校がつくられていく中で、スロイド教員養成の必要性を感じ、1874年春にスロイド教員養成所の計画書を作成した⁶⁹⁾。さらに同年秋に、18歳以上のスロイド経験者を対象とした1年制のネース・スロイド教員養成所を発足させた。その計画書においてサロモンは「教師は教授者(undervisare)であるだけではなく、教育者(uppfostorare)でもあることを常に忘れてはならない」と述べ、「教師は考えていることと、話していることと、行為が同じであることが必要である」「特別に重要であるのは、自分の意見をうまく表現することができること、自分の知識を生徒にうまく教えることができることである」とし、さらにスロイドの教師は、「彼が教えるスロイドの種類におけるすぐれた技能をもっていなければならないが、同時に働く喜びや働き者であり、整理整頓、責任感をもっていなければならない。そして、学校は教師でもあるという真実を常に思い出さねばならない」と述べている。また、具体的な計画のなかでは、スロイド教員養成所の教育内容は、1. 数学と幾何、2. 自然科学、3. 線図、4. スロイドの4つの分野から構成されていた。スロイドについては、「多様な道具に関する知識や技能、より簡単な台所用品を修理し、製作する練習、建物の欠陥部分を修繕する練習、小さな、あるいは普通のサイズの家具の製作、作業車や手押し車の車輪やフレームの製作、鍛冶ややすりがけの技能」などが教育内容とされていた。1874年の時点では、木工に限定するのではなく、鍛冶ややすりがけなどの多様な種類のスロイドが入っていた点や「家具の製作、作業車や手押し車の車輪やフレームの製作」などのヘムスロイドの内容を教えようとしていた点などは、スロイド学校のスロイド担当教員を養成することを目的としていたことと関連していると考えられる。

サロモンはこの時点から数年間は、スロイド教員養成の取り組みに関して「同種の施設が他になかったので、先行経験が得られず、試行錯誤が続いた」と述べている⁶⁹⁾。しかし、1876年の時点では国民学校教員がスロイドを教える可能性について以下のように述べている。「国民学校でスロイドを教える人は自分が担当するなにかの種類のスロイドについての卓越した技能をもっていなければならないということは、一般的にあって必要のないことである。」「国民学校が職人(大工、鍛冶職人、彫刻士、籠編み職人など——サロモンによる注解)を養成することを引き受けるべきであるということであれば、この教育を担当する人が職人であることは疑いもなく、重要である。」「しかし、国民学校におけるスロイド教育の目的は、一方で労働を何か愉快なものとして、他方で生徒の将来の生計に必要なものとして、生徒が労働を愛好することを学ばせることである。さらに、生徒にその有用な用途について洞察させ、彼らが自分の手を使ってつくることを学ば

せることであり、普通にある道具を使用するための知識と技能を教えることである。』⁶⁹⁾

以上のように、国民学校のスロイド教師のもつべき能力の問題について、サロモンは1876年の時点にはなにかのスロイドについての卓越した技能をもつ必要はなく、普通にある道具を使用するための知識と技能を教えることが必要であるという見解に到達していた。

サロモンは、職人をスロイド教師に養成することには否定的であった。以下の文章は、1891年に書かれた文章からの引用であるが、すでに1876年の時点でサロモンは職人が必ずしもスロイド担当教員としてふさわしいわけではないことをすでに自覚していたように思われる。「ある特定の分野で技能的にすぐれた人物が同時にすぐれた教師(pedagog)ではないので、彼は自分を生徒の立場におくのではなくて、生徒を自分の立場にたたせようとする。」「職人は一般的に言って、段階的に発達させることの必要性をまったく見落とし、生徒に対する関係は指導者としての関係よりも援助者としての関係になってしまう。」「(職人は)学校スロイド(skolsløjden)の基礎におかれなければならない教育的な考え方を理解することはほとんど稀な場合でしかない。」「(職人は)作業の目的は作品を完成させることにあるのではないことを理解することが困難である。」「それゆえ、職人の観点からの実際のやり方は教育的なねらいとは異なるものになってしまう。そして職人の教授は生徒にとって便益があるよりも有害になってしまう。」「職人は、工房の伝統を忠実に学校にも維持しようとする。そして、教師と生徒という関係よりも職人と徒弟という関係が続くことになる。」「職人は生徒が独立して作業することを学ぶことが最も重要であると考えてのではなく、生徒のかわりに職人が自分で作業をする、あるいは一番重要なところの作業をする」「職人によって指導された学校は、よい作品をつくるが、よい作業をつくることはほとんどない。』⁶⁹⁾

おわりに

本稿では、主として1891年にサロモンが作成したネース・少年スロイド学校やスロイド教員養成所の説明資料をもとに⁶⁹⁾、サロモンの1876年までの初期のスロイド教育実践とスロイド教員養成の構想を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

ネース・少年スロイド学校は発足して2年経過した1874年に入学年齢を10~11歳に下げて、国民学校としての性格をかねそなえたスロイド学校に変化させた。

1876年の時点においてサロモンはすでにスロイド教育を木工に限定することの有効性を発見していた。すなわち、木工は日常生活で出会う道具を使用すること、体力の発達を促すこと、日常生活に役立つものをつくることなどなどの点で、普通教育的意味をもつことを発見した。1872年にネース・少年スロイド学校が開始されたときには、そこでのスロイド教育はヘムスロイドを教えることが目的であったと考えられるが、その2年後の組織改革でより多くの普通教育科目

を導入することによって、スロイドに配当する時間が減少させられ、そこでのスロイド教育は「一般的な技能を獲得する」ことに目的がおかれるようになった。また、教授法の点でも、職人による「慣習的な方法」からナイフの使用から出発するという方法へ転換していたが、これも「一般的な技能を獲得する」目的への転換からもたらされたものであった。

このようなスロイド教育の目的や教授法の転換が起こった要因には、当時の民衆教育機関の発展過程におけるスロイド学校と国民学校の統合問題があった。農民の子弟を対象としたスロイド学校は国民学校と統合して、はじめて生徒を確保できるという実態が存在したが、そのことによってスロイド教育に配当される時間数は当然減少した。そこでのスロイドは販売を目的とする農村工業的なヘムスロイドではなく、より一般的な性格をもつものへの転換が迫られた。また、他方、国民学校の方もスロイドを教科として導入することにより、理論的な学習と実践的な学習とを組み合わせることで、理論的な学習に偏している国民学校の実態を農民にとって受け入れられる学校に変化させることがもとめられていた。

サロモンは1876年の時点において、国民学校においてスロイド担当する教師として必ずしも職人がふさわしいわけではないこと、むしろ教育的な考え方を理解することができ、生徒に労働を愛好することを学ばせ、普通にある道具を使用するための知識とやり方を教えることができる国民学校教師が望ましいと考えていた。

サロモンがシグネウスとはじめて会ったのは、1877年5月から6月にかけてのフィンランド訪問のときである。本稿では言及できなかったが、彼らはその後10年間にわたって手紙を交換している。筆者はそれらを通読したうえで、両者の最大の相違点はスロイド学校の問題にあり、最初から最後まで二人の見解は平行線のままであったことを見いだした⁶⁰。すなわち、シグネウスはスロイド学校を、初等民衆教育を担当する国民学校と峻別し、職業教育を担当する学校であるとみたが、サロモンはスロイド学校を国民学校と統合することによって、国民学校に発展的に解消していくものにとらえていたと思われる。

以上から、松崎の指摘する①、②、③及び④はすでにサロモンがネース・少年スロイド学校の実践で到達していた内容であり、シグネウスから学んだ内容ではないと結論づけることができよう。

本稿でとりあげた時期のものは、サロモンが「教育的スロイド」として具体的な教材として編成したモデル・シリーズが登場する以前の段階のものである。サロモンの1880年代から1890年代にかけての発展については、稿を改めて述べることにしたい。

(注)

(1) 同時期に40ヶ国以上からの参加者がネースでの講習会に参加した。また、彼らは帰国後スロイド教育に関する書物や論文を執筆し、さらに多くの国に間接的に影響を与えた。

(2) その成果の一部は、拙稿「手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流——手工科に与えたスロイドの影響の再評価——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第50巻第2号、2004年3月、Etsuo Yokoyama & Ulla Johansson ‘The Introduction of Sloyd into Swedish Elementary Schools’『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第51巻第2号、2005年3月、等を参照されたい。

(3) ウノ・シグネウス (Uno Cygnaeus, 1810-1888) は、1866年から発足したフィンランドの国民（民衆）学校 (Folkskolan) 制度の創設に、またその国民学校のカリキュラムの中に手工科を必修教科として世界最初に導入した点でも大きな役割を果たした人物である。当時フィンランドは帝政ロシアの支配下にあったが、そのもとでのフィンランド自治政府が民衆学校の組織化に関する意見書を1856年に公募したことがあり、その際シグネウスの提案は高く評価された。そのことによって彼は1858年に約1年間ヨーロッパの教育視察に派遣された (スウェーデン、デンマーク、プロイセン、ザクセン、オーストリア、スイス)。その旅行中に会った教育家たちの中で、彼が特に強い印象を受けたのはスウェーデンの民衆教育の推進者ルーデンショルドとプロイセンにおけるペスタロッチ思想の継承者・普及者デイステルヴェークであり、スイスにおいては、「すでにペスタロッチが没して30年になっていたが、小学校、師範学校の教育のすぐれた実践が、彼に深い感銘を与えた」のであった。帰国後に彼が政府に提出した視察報告書と提案は1866年に発足するフィンランドの国民学校制度の基本構想となったとされる。1866年の国民学校制度の発足に先立ち、1863年にユバスキュラに師範学校が創設されるが、シグネウスはその校長となり、その学校のカリキュラムには手工と農業実習が含まれていた (松崎巖「スロイド教育の思想と実践—シグネウスとサロモン」『技術教育』1973年5月、p.51)

(4) 本多雄伸は「ウノ・シグネウスと手工教育」(日本大学教育学会『教育学雑誌』第40号、2005年)において、「(遠藤敏明氏は)『オットー・サロモンは国民学校で教科スロイドを教えるのは教育学的な訓練を受けた国民学校教師が最適であると考えようになった』としているが、これはサロモンの考えではなく、1877年にフィンランドのユバスキュラを訪問したサロモンが、シグネウスから直接教示されたもので、シグネウスの考えである」と主張している (p.10)。また、同氏は、「サロモンは、職人や職工を教員に仕立て上げて職業教育を行うことを止め、シグネウスの考えを取り入れて、小学校の現職教員を集めて普通教育としての手工教育教授法を教えるようになった。」(p.9)と述べている。

(5) 松崎巖「教育的スロイドの成立と発展について」『青山女子短期大学紀要』第18号 (1964年)

(6) なお、注(5)の松崎の論文にみられるネース・スロイド学

校に関する記述（1868年にネースの少年スロイドが設立されたとする点や1872年に改組されたとする点、及びこの学校の名称を *arbetsskola* としている点や1872年の改組後の教育内容などの点）は後述するように明らかに誤りであるが、それらの内容はBennettの叙述にもとづいて書かれている（C.A.Bennett, *History of Manual and Industrial Education 1870-1917*, p.55-p.62）。ただ、松崎が「普通教育の一環としてのスロイドという考え方はなかった」と評価している点を、Bennettは「1876年までの時期のスロイド教育は経済的な必要にもとづくもので、本質的にホーム・スロイド (*home sloyd*) であった」としている（*ibid*, p.62-p.63）。

- (7) 「スロイド教育研究—19世紀末からの歴史的展開と現代的意義—」筑波大学博士学位論文（未公開）1993年
- (8) 本多は「1872年、スウェーデンのネースでオットー・サロモンが小学校を修了した少年を対象にした職業教育学校を開いた。この当時、スウェーデンでは各地にこのような職業学校が林立していたが、サロモンは教員養成の重要性を見抜き、1874年に自分の職業学校に意識の高い職人や職工を手工科教員に仕立て上げる教員養成課程を併設した。この頃のサロモンは、職業教育の普及と向上に傾注していた。」と述べている（本多雄伸「ウノ・シユグネウスと手工教育」〔日本大学教育学会『教育学雑誌』第40号、2005年、p.8〕なお、本多はこのように述べた根拠として、松崎巖の「教育的スロイドの成立と発展について」をあげている。
- (9) 注(6)参照。なお ベネットは英語文献以外にもとづいて北欧のスロイド教育にかかわる章 (*Sloyd of Scandinavia*) を執筆しており、スウェーデン語の文献はまったく参照していない。本稿でとりあげるサロモンの“*Slöjdskolan och folkskolan I*” (1876) をはじめ、サロモンがスウェーデン語で書いたものの中に英語に翻訳されていないものが多く存在している。
- (10) Hans Thorbjörnsson, *Nääs och Salomon -slöjden och leken*, 1990
- (11) Hans Joachim Reincke, *Slöjd-Die schwedische Arbeitserziehung in der international Reformpädagogik-*, PETERLANG, 1994
- (12) スウェーデンに定住して、その営業に対する保証書を得るためには、最低限2000ダーレルの資本金が必要とされた。ダーレは当時のスウェーデンの貨幣単位で、当時の普通の労働者の賃金は年100ダーレル以下であった。つまり、裕福なユダヤ人だけが移民として歓迎された（Eva Helen Ulvros, *Sophie Elkan*, s.27, 2001）。
- (13) David Glück, Aron Neuman, Jacqueline Stare, *Sveriges judar*, 1997
- (14) さらに彼の父親であるアロン・イサック (Aron Isaac) は印鑑彫版工 (*sigillgravören*) であった。
- (15) 後のTekniska högskolan (ストックホルム工科大学)
- (16) 幼児学校は2年あるいは3年制の学校で、その後に国民学校（その修業年限は幼児学校が2年の場合は国民学校

は4年、3年の場合は3年であった）が続いた。当時の民衆教育は最大で6～7年間（7-14歳）で、人口の大部分が住む農村部では隔日に登校する学校 (*varannandagskolan*) や教師がいくつかの学校を訪問する巡回学校 (*ambulerande skolor*) などに通学する生徒も多かった。農村の子どもは、農業労働に年齢に応じて従事しており、農村部の親の学校教育に対する「抵抗」 (*motstånd*) はある地域では1920年代まで続いた（Mats Sjöberg, *Att säkra framtidens skördar-Barndom, skola och arbete i agrar miljö: Bolstad pastorat 1860-1930*, Linköping universitet, 1996）。なお、幼児学校の教員はすべて女性で *småskollärarinna* と呼ばれた。

- (17) 1842年の民衆教育令 (Kungl. Stadgan den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket) によって、すべての民衆に義務教育を課するという理念が確立されたものの、この国民（民衆）学校 (*folkskola*) が普及するまでに相当の期間を必要とした。その現象はスウェーデンの人口の大部分をかかえる農村部で顕著であり、児童労働を必要としている農家に4年間の義務教育を普及させるのに80年ちかい年月を要した（農村部では、隔日学校 (*varannandagskolan*) が1920年代まで存在した）。このような変則的な形態の学校を含めて、国民（民衆）学校の就学状況を別表にかかげておく。なお、管見の限り、19世紀から20世紀にかけてのスウェーデンの教育事情を述べた適切な邦語文献はないので、当時の国民学校制度全体の動向については、本稿では省略せざるをえない。詳しくは、*Svenska folkskolans historia del 2 (1860-1900)* を参照のこと。なお、この本は、スウェーデンの国民学校制度が創設されてから100年目にあたる1942年に発行された。
- (18) ネース・少年スロイド学校の取り組みを記録したものとしては、1876年にサロモンがネースのスロイド学校について書いた史料 (“Om Nääs slöjdskolor”) がある。この史料は、同年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会での展示に向けて書かれたものと考えられる。その後、1891年にサロモンがネースのそれまでの歩みについてまとめた *Något om Nääs och dess läroanstalter* という冊子がある。以下の叙述はこの1891年の冊子にもとづいている（1876年の史料よりもこの冊子の方が詳細に書かれているという理由からこれを主に使用した）。この1891年の冊子は、同年8月5日にスウェーデン国王 Oskar II 世がネースを訪問した際に、その説明資料として作成されたものである。その他には、この学校の25周年である1897年6月30日に行ったサロモンの講演記録が “*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.147, 1897. juniに ‘Högtidstal’ と題して残されている。また、サロモン没後、1942年に70周年の記念誌 (*Nääs 1872-1942, Minneskrift*) が出版され、その中にも少年スロイド学校にかかわる記録が書かれているが (*ibid*, s.31-s.35)、その内容は1891年の冊子の内容を紹介したものである。

- (19) Per Hartman, *Slöjd för arbete eller fritid?*, 1984, s.9 なお、ヘムスロイド (hemslöjd) とは基本的には農村部において農業や家庭生活に必要なものを簡単な道具でつくことで、地域によってはその特産物として家庭において使用する以外にも販売に出すものを生産することもあった。工業化による安価な製品の普及、農村での労働形態の変化によって、1860年代後半に減少したとされ、1870年代に入ってヘムスロイド復興運動が展開した。
- (20) 線図はサロモンが重視していた教科の一つであった。サロモンはスロイドの技能 (slöjdfärdighet) は製図の技能 (ritfärdighet) に支えられるとし、このスロイド学校では隔日に3時間づつ (週9時間) を線図にあてていた (*Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.27)。また、サロモンは1876年に *Kortfattad handledning i linearritning* (線図のための手引き) を出版している。この当時に国民学校における製図教育をめぐって、2つの対立する見解が存在した。一つはフリーハンドのスケッチ (frihandsteckning) 他の一つは線図であった。サロモンは個人の才能の違いによらないで誰もが獲得すべき能力を重視する観点から線図を重視していた (“Om Nääs slöjdskolor” 1876, s.6.)。
- (21) 糸鋸 (löfsågning) は当時スウェーデンにおいて流行し始めていたとサロモンは書いている (Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13)
- (22) 6月30日に落成式が開催されたが、その際に祝辞を述べた人物は、エルフスボリエ県の県知事のエリック・スパレであった。彼は、国会議員 (Riksdagman) であるとともに、この県のヘムスロイド協会の代表でもあり、スロイド教育問題に熱心に取り組み、国民学校へのスロイド教育の導入に関する動議を1876年の国会に提出した (この国会では否決されたが、翌年の国会でスロイド教育を実施する学校への補助金に関する法律が可決された)。
- (23) このスロイダレ (slöjdare) は、スロイドをおこなう人といかえることができるが、*Ordbok över Svenska Språket utgiven av Svenska Akademien* (第28巻) という辞典によれば、この1800年頃から1900頃にかけては、スタータレ (statare、農場労働者) と同じように農場に雇用された労働者であり、農場に必要なものを製作するということで、少し高い賃金を得ていた人をさす言葉であった。
- (24) 1891年にサロモンによって書かれた文章には、「(熊手と手押し車がつくられたのは) 奇妙なことですが」という言葉が付け加えられているが、この言葉は、1891年の時点で到達した地点からみて、「(その時点で到達した) 教育的スロイド」からみて、という意味であると解釈できよう。
- (25) 1876年2月に作成された史料 (“Om Nääs slöjdskolor”) では、夏時には午前6時から午後7時まで (うち2時間は日中の休憩時間)、冬時には午前7時から午後6時までが学校が開かれていたようである。
- (26) サロモンは「労働者階級 (kroppsarbetarnes klass) の親」と表現しているが、スタータレ (農場労働者) をさして
- いると考えられる。なお、当時の農場労働者の日当はおよそ1クローネ (100オーレ) であった。
- (27) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13
- (28) 上級段階とは幼児学校を1, 2学年とすると5学年と6学年に相当する部分であり、7歳で幼児学校に入学した生徒は11歳から12歳の年齢段階にあたる。
- (29) 1874年改革以後のネース・少年スロイド学校のカリキュラムの各教科の時間数等に関する資料は、以下に示すイエテボリ公文書館の筆者への回答 (2005年10月12日付) がある。現在のところ、これ以上の詳細は知られていない。
「August Abrahamssons stiftelse (財団) のアーカイヴには、1875年度と1876年度の修了証明書の写しがわずかに保管されている。それには、生徒が学んだ教科についての全体的な表は記載されておらず、生徒ごとに学習した教科は異なっている。そこに記載されている教科は、算数 (räkning)、数学、製図 (ritning)、線図、物理、鍛冶、音楽、ドイツ語、英語、一般的な知識 (allmän kunskap) であり、教科ごとの時間数についての記載はない。」
- (30) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.18
1870年代のネース・少年スロイド学校は修業年限や学年の修了という制度や概念がはたして存在したのかどうかを含めてよくわかっていない。1876年のこの学校の生徒数は12名で、年齢は12歳から16歳であった (Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876 s.73)。このスロイド学校は1888年に閉鎖された。一方、(同地区に存在した) ネース・国民学校 (Nääs folkskola) の生徒の記録簿 (Examens Katalog) が、レルム・コミュン (Lerums kommun) のアーカイブに残されている。その資料 (1881年から1899年までの記録簿が残されている) によると、この国民学校は1881年から1888年の間は、第1学年から第3学年までの3年制であった。
- (31) *ibid.*, s.19
- (32) *ibid.*, s.21-s.22
- (33) *ibid.*, s.26
- (34) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876 s.26-s.27
- (35) Otto Salomon, ‘Något om slöjd och slöjdundervisning samt plan till seminarium för utbildande af slöjdlärlare’ *Lansbruksakademins Tidskrift*, nr.5, 1874, s.303-s.312
- (36) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.43
- (37) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876, s.39-s.40
- (38) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, s.41-s.42
- (39) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, Otto Salomon, ‘Något om slöjd och slöjdundervisning samt plan till seminarium för utbildande af slöjdlärlare’ *Lantbruksakademins Tidskrift*, nr.5, 1874, s.303-s.312
サロモンはこの1891年の資料で、「この考え方 (本稿で紹介した内容をさす——引用者) で作成されたモデル・シリーズは1877年に初めて公開され、エルフスボリエ県のスロイド展覧会において賞を授与された」 (*Något om*

Nääs och dess läroanstalter, s.27) としている。筆者が確認できるサロモンの教育的スロイドの「モデルシリーズ」は1880年代前半以降のものであり、この1877年のモデル・シリーズはまだ確認されていない。

- (40) これらの手紙の一部は、拙稿「『教育的スロイド』の成立をめぐって」(『技術と教育』第362号、2004年2月)において1881年9月29日付のシグネウスのサロモンへの手紙を紹介した。これらの手紙を読むかぎり、サロモン

はシグネウスからペスタロッツ、フレーベル、ディステルバークなどのドイツ語圏の教育学の成果を学ぶ必要性を教えられたということがシグネウスのサロモンへの影響の内容であったと考えられる。この点については別途検討する予定である。サロモンはフィンランドから帰国後、1880年頃までにこれらの教育学の著作を購入し、その研究成果をもとに*Slöjdskolan och folkskolan IV* (1882)、*Slöjdskolan och folkskolan V* (1884) を執筆した。

別表 学校形態ごとの生徒数とその割合の変化 (1847年～1881年)

	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計
1847	99,343	91964	191,307	51.9	48.1	100
1850	143,526	126,178	269,704	53.2	46.8	100
1853	152,039	132,033	284,072	53.5	46.5	100
1856	159,745	146,483	306,228	52.2	47.8	100
1859	174,418	155,824	330,242	52.8	47.2	100
1865	189,366	149,745	122,717	...	461,828	41.0	32.4	26.6	...	100
1866	189,928	157,121	133,591	...	480,640	39.5	32.7	27.8	...	100
1867	194,075	158,287	152,006	...	504,368	38.5	31.4	30.0	...	100
1868	200,339	157,616	162,591	...	520,546	38.5	30.3	31.2	...	100
1869	208,514	153,445	171,925	...	533,884	39.1	28.7	32.2	...	100
1870	214,784	153,928	186,883	...	555,595	38.7	27.7	33.6	...	100
1871	224,444	152,806	199,603	...	576,853	38.9	26.5	34.6	...	100
1872	233,021	151,429	213,665	...	598,115	39.0	25.3	35.7	...	100
1873	239,495	149,565	218,616	...	607,676	39.4	24.6	36.0	...	100
1874	244,757	147,789	222,305	...	614,851	39.8	24.0	36.2	...	100
1875	249,757	139,837	223,830	...	613,424	40.7	22.8	36.5	...	100
1876	238,612	109,452	38,880	185,276	572,220	41.7	19.1	6.8	32.4	100
1877	242,339	102,256	41,593	183,944	570,132	42.5	17.9	7.3	32.3	100
1878	248,566	98,328	43,590	187,107	577,591	43.0	17.0	7.5	32.4	100
1879	249,031	91,450	42,189	188,999	571,669	43.6	16.0	7.4	33.1	100
1880	251,351	86,201	39,503	196,873	573,928	43.8	15.0	6.9	34.3	100
1881	249,879	80,483	42,870	192,753	565,985	44.1	14.2	7.6	34.1	100

この表の左半分は各学校形態ごとの生徒数であり、右半分はその百分率である。固定型国民学校 (Fasta folkskolor) は独自の校舎をもつ国民学校で、有資格教員が教えている学校である。巡回型国民学校 (Flyttande folkskolor) は有資格教員が巡回する形態の学校教育である。低学年学校 (Mindre skolor) と幼児学校 (Småskolor) の形態は多様であったが、前者は無資格教員が、後者は幼児学校の教員資格を持った教師が教える学校である。1871年から幼児学校は国民学校の準備教育を行う学校となった。それ以前はこれらの学校は国民学校の代替機関であると親がみなした地域も農村部ではあった。なお、この表にはあらわれていないが、学校に通わず、家庭で親が教育を担当する形態(Hemundervisning)もあった。1870年代前半では約1割の子どもがそのような形態を選択し、コミュニケーション(地方自治体)から承認を得ていた。参考文献”Elever i obligatoriska skolor 1847-1962”(Statistiska centralbyrån), 1974,s.55

(2005年9月29日 受理)

(2005年11月25日 再受理)

A Study of Otto Salomon's Sloyd Education in his Earlier Stage

— Analysis of the Practice of Naas Sloyd School for Boys (1872-1876) —

Etsuo Yokoyama, *Nagoya university*
n47131a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

Key words : Otto Salomon / sloyd / integration of sloyd school and folk school / Naas sloyd school for boys / Uno Cygnaeus

In this paper, I analyzed mainly the practice of early sloyd education of Naas sloyd school for boys. Naas sloyd school for boys, which was found in 1872, lowered the entrance age into 10 to 11 years old in 1874, and changed to sloyd school that had also the side as folk school. The school taught home sloyd as sloyd education in 1872, however it introduced many general subjects by reform of 1874 and the purpose of sloyd education changed to teach general skills. From analysis of the practice of Naas sloyd school for boys (1872-1876), Salomon had reached the idea that sloyd education should be a part of general education before he met Cygnaeus in 1877.

At the point of 1876 Salomon had already noticed the effect of restricting sloyd education to wood work. In other words, he had found the meaning of teaching wood work as general education in the points that it needs tools people use in their daily life, promotes their physical strength, and turns out products that are useful for their daily life. Though the purpose of sloyd education was teaching home sloyd when Naas sloyd school for boys was started in 1872, because of reform of 1874 and introduction of more general subjects it

had to lower the number of time allocated for sloyd education and the purpose of it changed to "teach general skills". Then about the teaching method, it changed to how to use knife from traditional way by craftsman, it was also made by the change of purpose to "teach general skills".

There was a problem about the integration of sloyd school and folk school in the process of development of popular education system as the background of the change. There was a situation that sloyd school, which should get pupils from farmer's children, could get enough pupils by integrating sloyd school and folk school. And it meant that it was needed for sloyd school to lower the number of time allocated for sloyd education. In addition, it was needed to change the purpose of sloyd education from teaching home sloyd (in other words, selling products as a rural industry) to teaching sloyd as general education. On the other hand, folk school, which was biased toward theoretical study, was also needed to change to be more acceptable for farmers by introducing sloyd as a subject and teaching both of theoretical and practical subjects.